

学 位 論 文 要 旨

氏 名

宮腰 晃依



論 文 題 目

「The Combination of Hearing Impairment and Frailty Is Associated
with Cognitive Decline among Community-Dwelling Elderly in Japan
(日本の地域高齢者における認知機能低下と難聴およびフレイルの関連性)」

指 導 教 授 承 認 印

高橋 香代子



The Combination of Hearing Impairment and Frailty Is Associated with Cognitive Decline among Community-Dwelling Elderly in Japan (日本の地域高齢者における認知機能低下と難聴およびフレイルの関連性)

宮腰 晃依

I. 背景

認知機能低下は、生活活動の遂行に影響しうる大きな課題である。世界的な高齢化進展の筆頭である我が国では、地域高齢者ができる限り自立生活を継続できるように、認知機能低下への効果的な予防介入が求められている。地域高齢者の認知機能低下は、難聴とフレイルのそれぞれに関連が報告されている。しかし、難聴およびフレイルの両者と認知機能低下との関連性は明らかになっていない。

II. 目的

本研究は、日本の地域高齢者の認知機能低下に対し、難聴とフレイルの交互作用が及ぼす影響について検討することを目的とした。

III. 方法

65歳以上の地域高齢者を対象に、自記式質問紙を用いた郵送法による横断的調査を実施した。認知機能低下は、「自記式認知症チェックリスト」(40点満点中18点以上)を用いて定義した。難聴は「聞こえについての質問紙」を使用して評価した。フレイルは、「基本チェックリスト」を用いて評価し、ロバスト(健常)、プレフレイル、フレイルを特定した。交絡因子として、年齢、性別、社会経済的要因、併存疾患、ポリファーマシー、栄養摂取状況等について調査した。解析として、多変量ロジスティック回帰分析を行い、難聴およびフレイルの交互作用と認知機能低下の関連性を検討した。

IV. 結果

回答が得られた559名(回収率26.4%)のうち、要介護認定者及び欠損値のあった方を除外し、464名を分析対象者とした。単変量解析の結果、難聴とフレイルはそれぞれ認知機能低下と有意に関連していた。多変量解析においては、ロバストでは難聴は認知機能低下と関連していなかった。一方で、プレフレイルとフレイルでは、難聴は認知機能低下と有意に関連していた(OR=2.74, 95%C.I. 1.24-6.03 and OR=6.20, 95%C.I. 2.54-15.10, respectively)。

V. 考察

難聴とフレイルとの間には交互作用があり、ロバストでは、難聴は認知機能低下に関連しないことがわかった。したがって、難聴と認知機能低下との関連性には、フレイルの状態が影響すると考えられた。特に、難聴とフレイルの併存が認知機能低下のリスクになりうることが示唆された。

VI. 結論

地域高齢者の横断的研究において、難聴と認知機能低下の関連性には、フレイルの状態が影響することが示された。本結果は、地域高齢者にとって、難聴とフレイルの併存が認知機能低下のリスクとなることを示した点で意義があり、今後の認知機能低下の予防介入の方向性を示唆したといえる。